

# スポーツ産業活動指数の試み

～第3次産業活動指数の再編集系列からスポーツ産業の動向を見る～

<<平成26年第2四半期>>

# スポーツ産業活動指数への採用系列

- 第3次産業活動指数は、一次産業、製造業、建設業を除く、各種の第3次産業の様々な供給側データを、産業連関表の付加価値（現在は2005年基本表）でウェイト付けして指数に加工
- スポーツ関係については、大分類「生活関連サービス、娯楽業」の中の「興行団」の中に、相撲、ボクシング、プロ野球、プロサッカー、プロゴルフ（基本的に観客数）の指数がある。また、同大分類の中に「スポーツ施設提供業」があり、その中にゴルフ場、ゴルフ練習場、ボーリング場、フィットネスクラブ（主として施設利用者数）の指数がある。
- これらの個別指数を2005年産業連関表基本表の付加価値ウェイトで加重平均することで、「スポーツ産業活動指数」を試算しようという試み。
- なお、興行団に属する各指数を統合したものを「観戦型スポーツ業」として中間分類を策定し、「スポーツ施設提供業」と対比させることとする。

# スポーツ産業活動指数のウェイト表

第3次産業総合	10000.0
スポーツ産業	71.2
観戦型スポーツ業	18.7
相撲	0.5
ボクシング	0.3
プロ野球	13.6
プロサッカー	3.5
プロゴルフ	0.8
スポーツ施設提供業	52.5
ゴルフ場	29.1
ゴルフ練習場	6.0
ボウリング場	5.8
フィットネスクラブ	11.6

スポーツ型産業活動指数の採用系列とウェイトは、左の表の通り。

スポーツ産業の第3次指数総合に対する割合は、0.75%程度。

現行のウェイトでは、スポーツ施設提供業のウェイトの方が大きいですが、指数の変動は、観戦型スポーツ業の方が大きい。

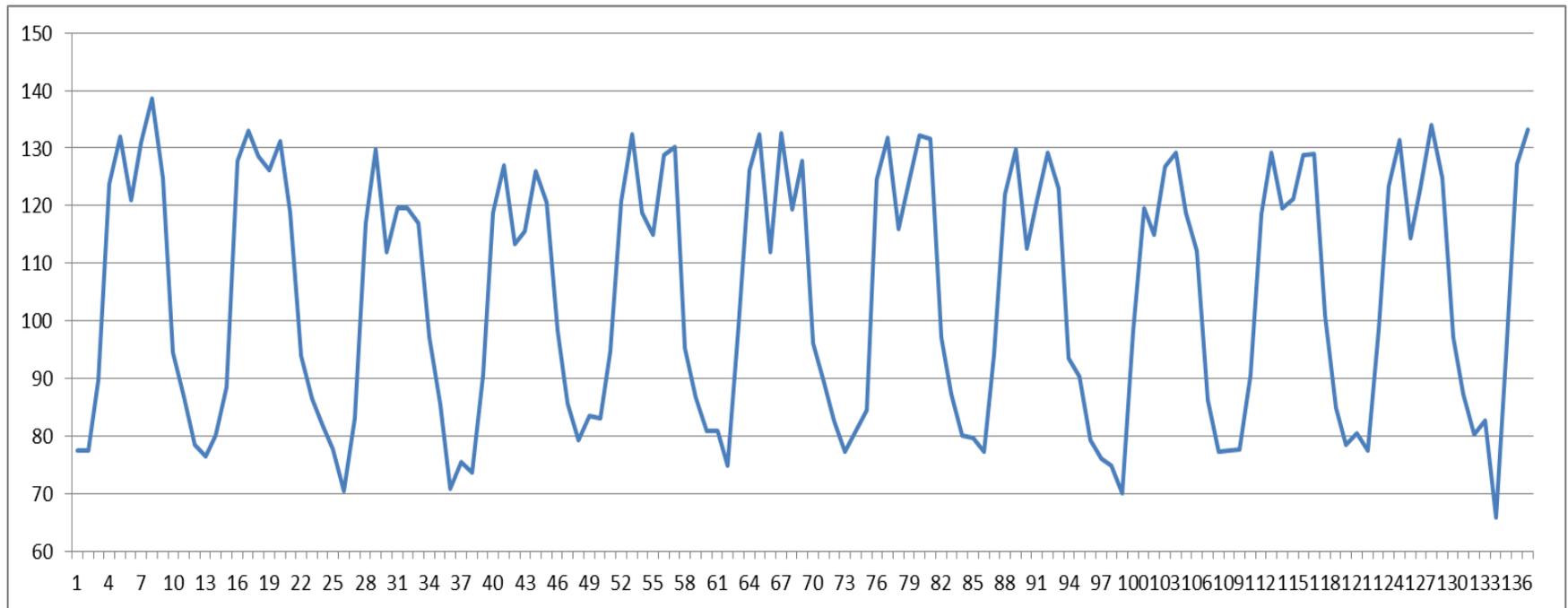
細分類では、プロ野球とゴルフ場のウェイトが大きくなっている。

# 月次指数の動き

「スポーツ産業活動指数」を構成する各系列の季節調整済指数を加重平均して作成した月次の指数をグラフにすると、下記のようになる。

明らかに周期変動しているが、これは、スポーツ産業におけるシーズンインとシーズンオフの影響。これらの系列は、シーズンオフとなると指数値、つまり観客数が0近くになり、シーズンインすると急増するので、スムーズな季節調整を施せない。

よって、スポーツ産業活動指数については、原指数をこれ以降は使用する。

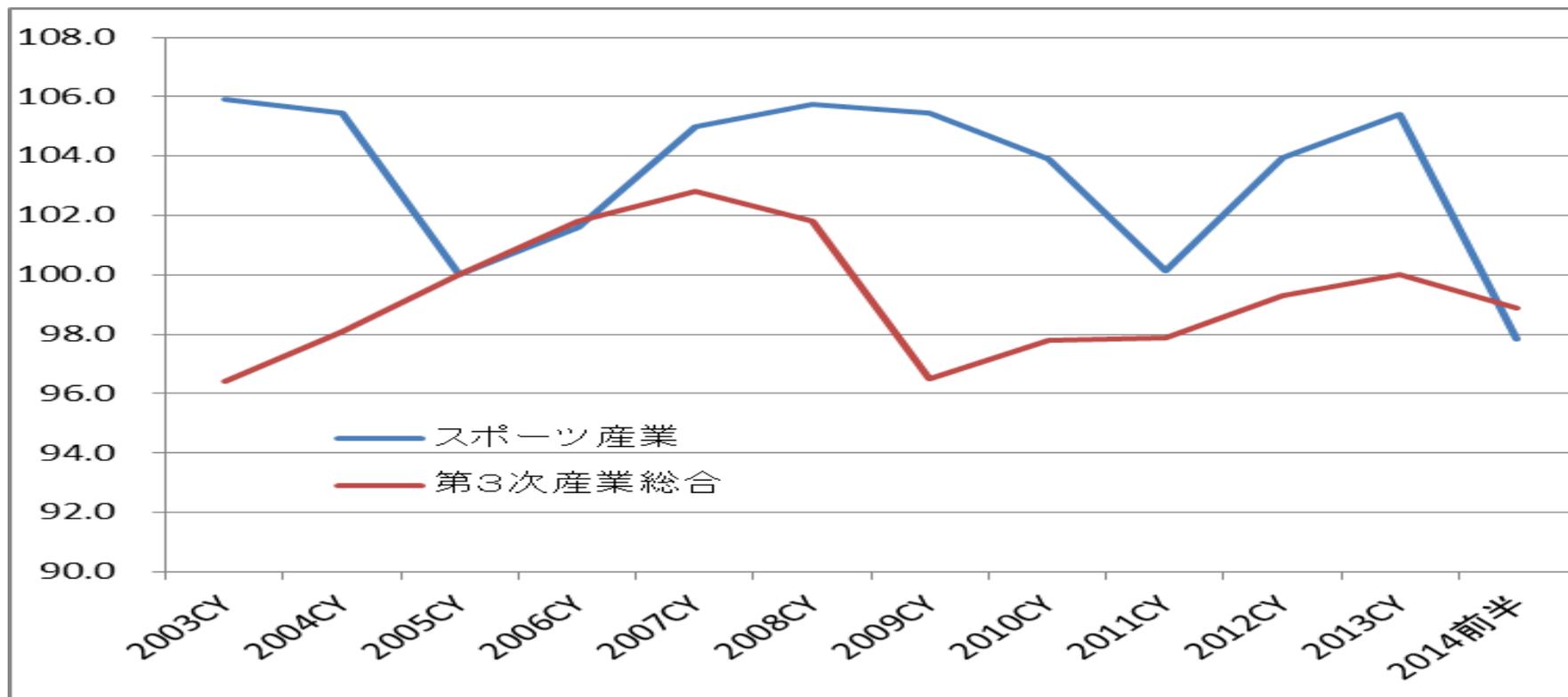


# スポーツ産業活動指数、暦年の推移

スポーツ産業活動指数と第3次産業活動指数総合の暦年の動きを比較したもの。

スポーツ産業活動指数は、08年の金融危機による世界的な不況の影響を受けることなく、05年から08年まで順調に上昇（指数値は08年で105.8でピーク）。09年、10年に若干低下し、やはり東日本大震災の年に大きく低下している。

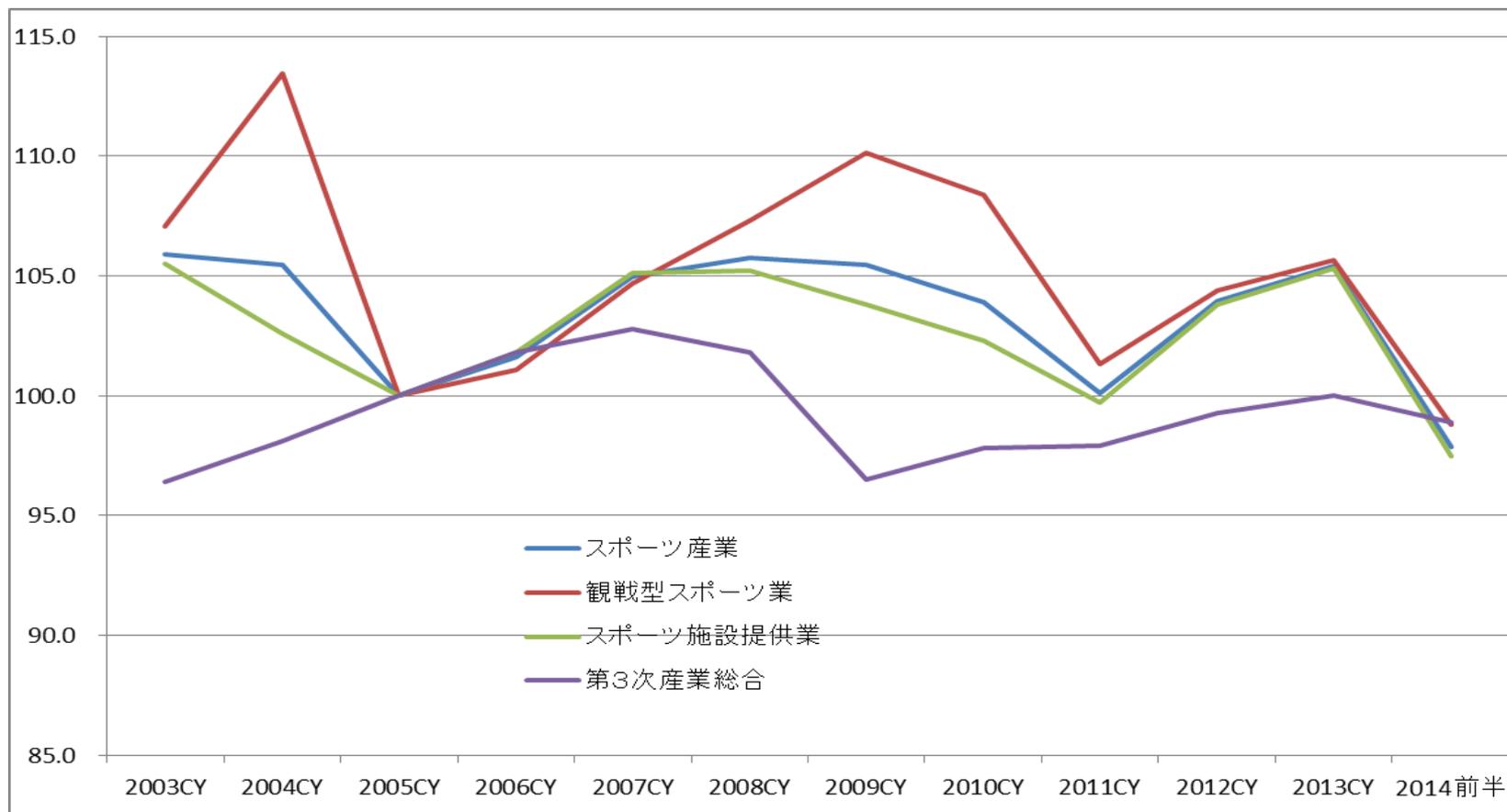
その後、12年、13年と回復し、13年の指数値は、105.4まで上昇（参考までにいうと、5月のスポーツ産業活動指数は117.0）



# スポーツ産業の内訳2分類の推移

スポーツ産業活動指数は、観戦型スポーツ業とスポーツ施設提供業に2系列で構成しているが、基準年である05年に両系列とも大きく低下。観戦型スポーツ業については、04年のプロ野球にストライキ騒動を受けて、翌年のプロ野球人気急落の結果。スポーツ施設提供業については、02年から始まったゴルフ場の倒産が05年まで続いたことの影響。

とはいえ、金融危機後のスポーツ産業を牽引していたのは、観戦型スポーツ業。同業も、やはり震災時に急減し、元の水準には戻っていない。

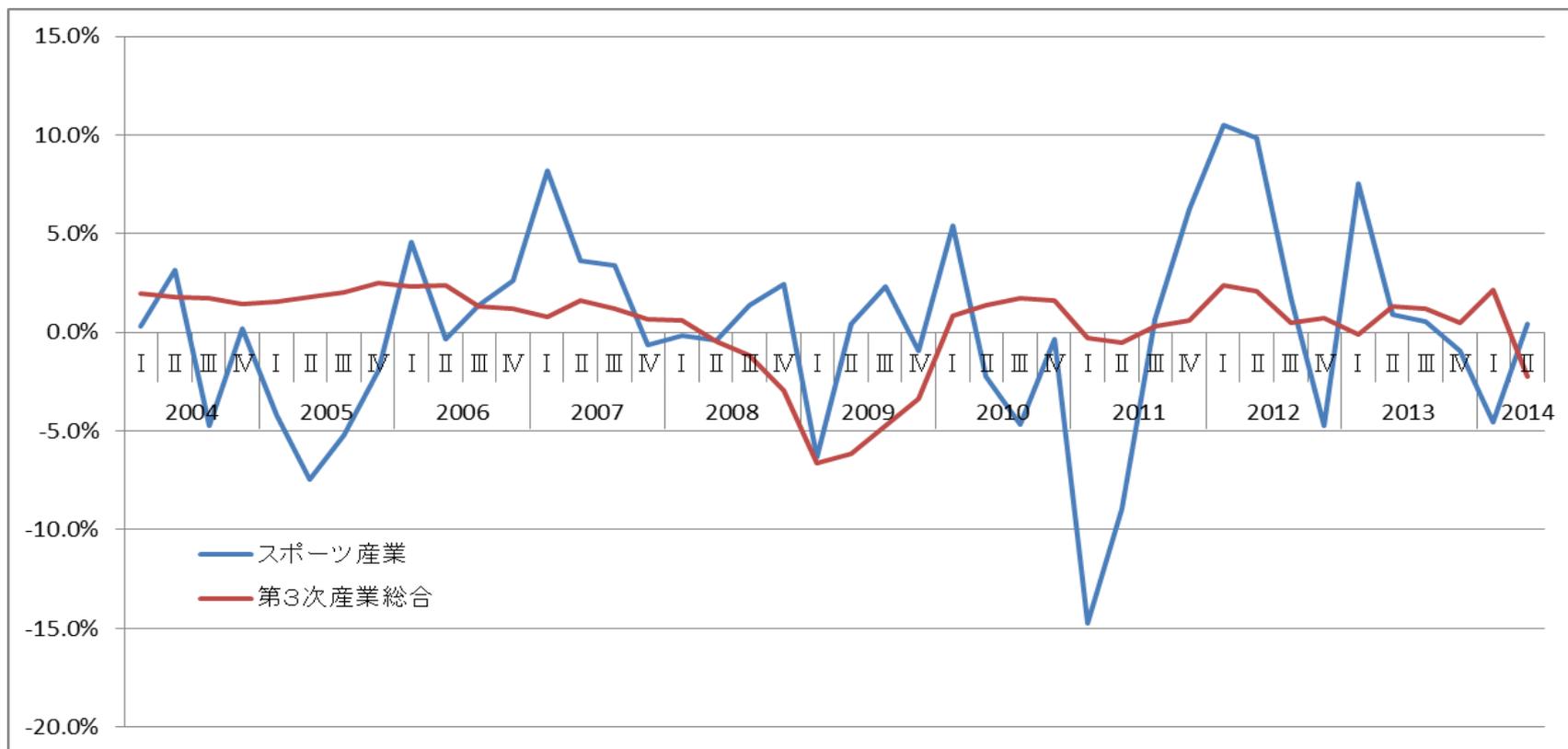


# 四半期での前年同期比の推移

四半期での前年同期比を見ると、やはり第3次産業総合に比べると、スポーツ産業の変動は大きい。

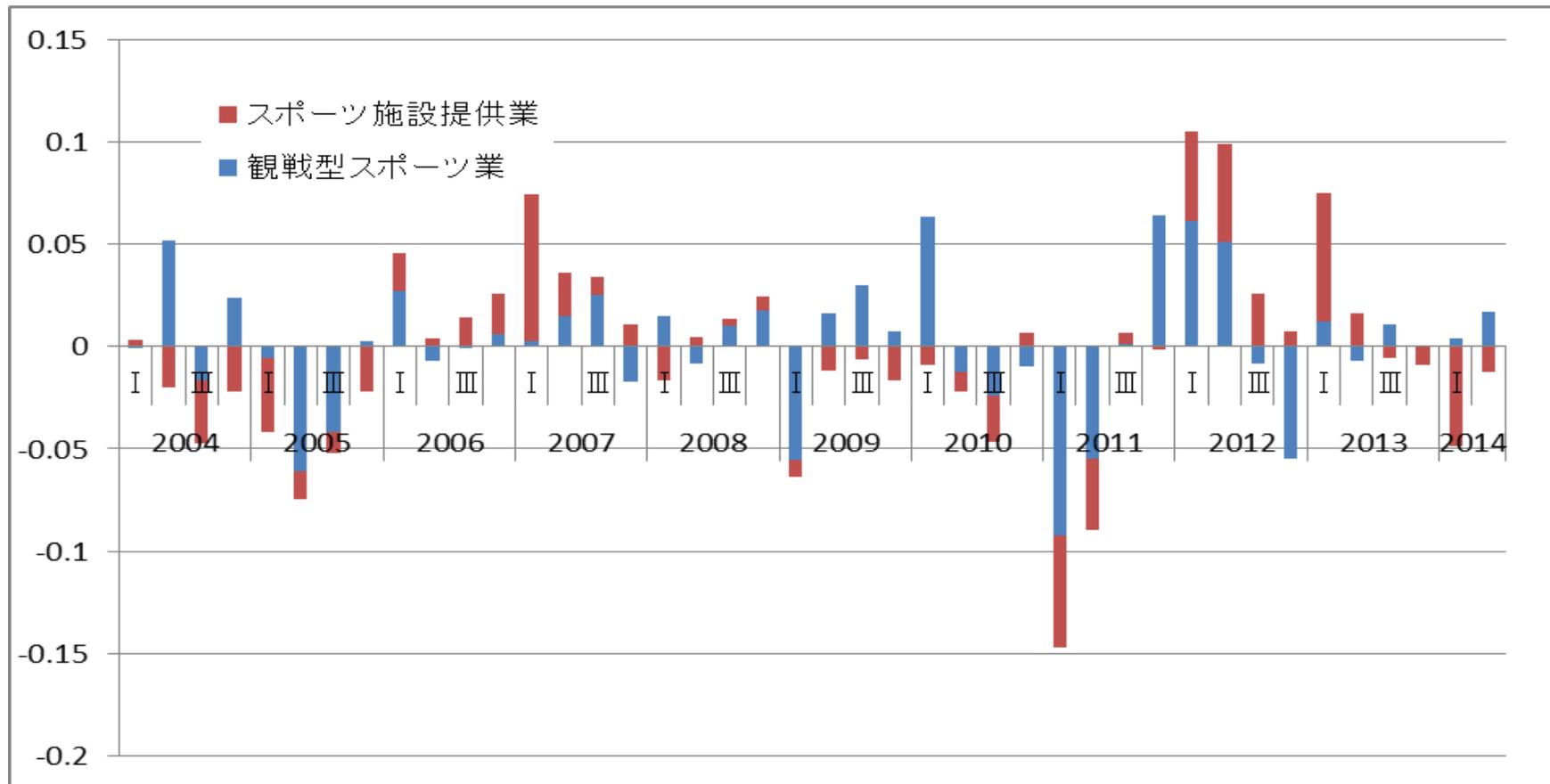
広義対個人サービスの中でも嗜好性の最も強い性質を有しているものと思われ、少しの条件変更等で大きく上下動する。この点は、11年I期の落ち込みなどに特に表れている。

よって、スポーツ産業活動指数の前年同期比を見るときは、その前年同期の水準をよく見ておく必要がある。



# 前年同期比の寄与度の推移

観戦型スポーツ業とスポーツ施設提供業の全体に対する前年同期比寄与度を見ると、ウェイトが小さいにもかかわらず、観戦型スポーツ業の寄与が大きく見える。各期の寄与度の平均も、スポーツ施設提供業が▲0.03%であることに対し、観戦型スポーツ業では0.13%となり、大きくなっている。

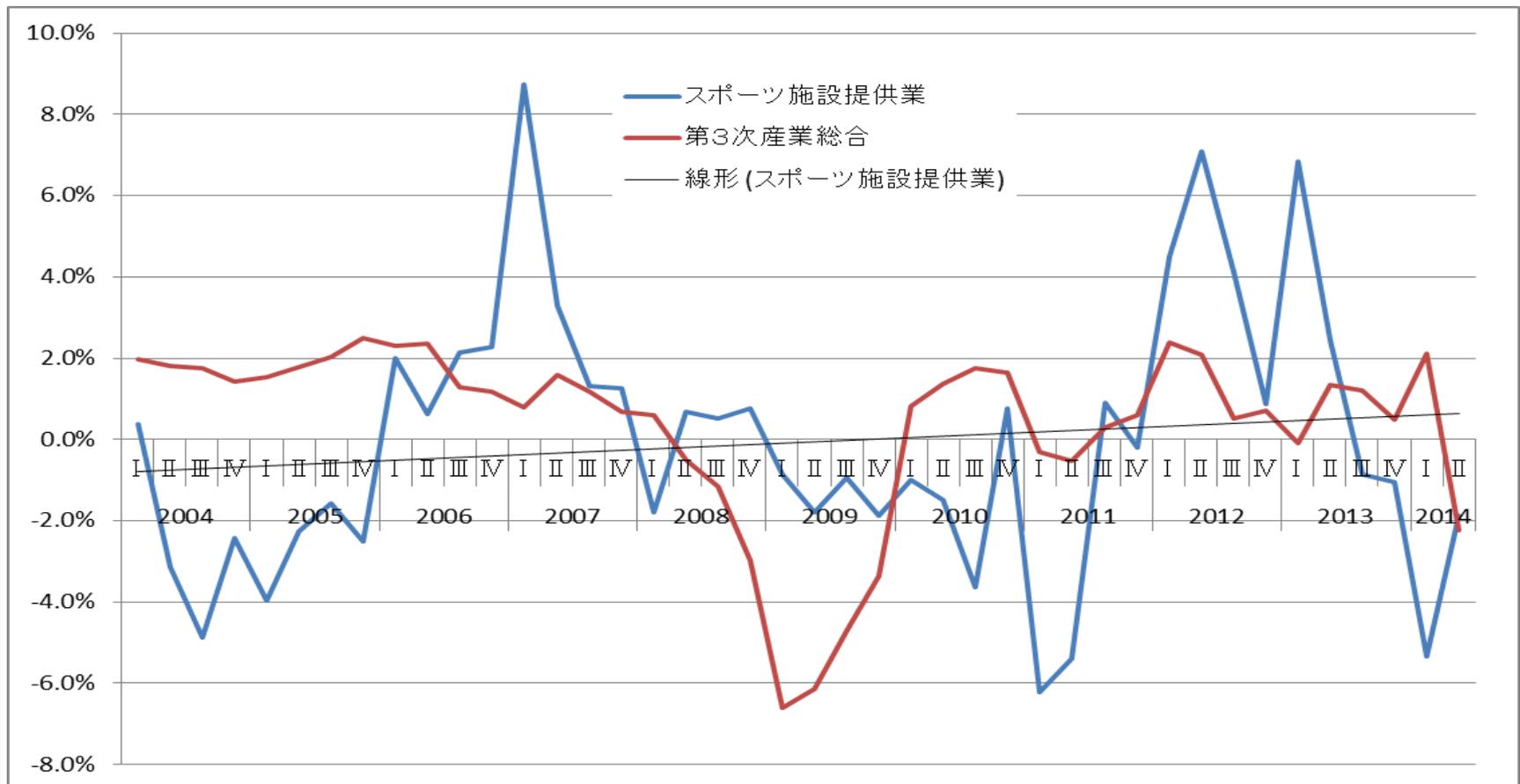


# スポーツ施設提供業の推移

05年の悪い時期を06年の脱し、第3次産業総合と比べると、1年遅れて低下傾向に入った。第3次産業総合は10年に入って本格的に回復してきたが、1年遅れのスポーツ施設提供業が上昇しようかという矢先に東日本大震災が発生し、急落。

その後、2年かけて回復してきているが、昨年後半から低下傾向にあり、本年第1四半期は、2月の大雪の影響が大きく、前年同期比▲5.3%低下となっている。

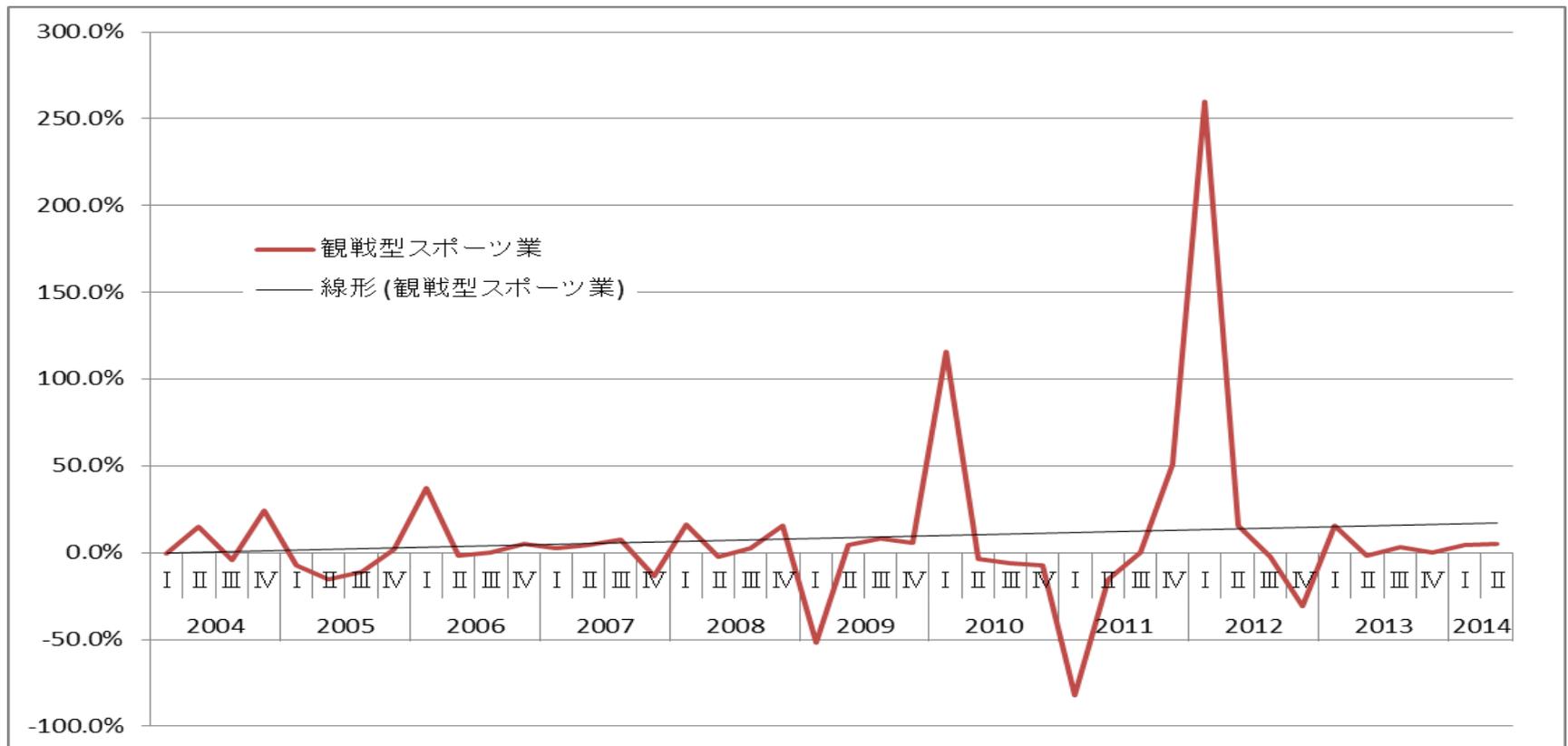
なお、スポーツ施設提供業の傾向線を引くと、右肩上がりとなっている。



# 観戦型スポーツ業の推移

観戦型スポーツ業は、前年同期比であるにもかかわらず、非常に変動が大きい(そのため、第3次産業総合のグラフを同じスケールで描けない)。

2004年以降では、2回極端に前年同期比が上昇する時期がある。10年I期については、09年においてWBCがあり、プロ野球の開幕が完全に4月となったため09年I期の指数値が0となっていることによる。また、12年I期については、11年3月の大震災のために、3月からのプロスポーツがほとんど開催されなかったことによる。



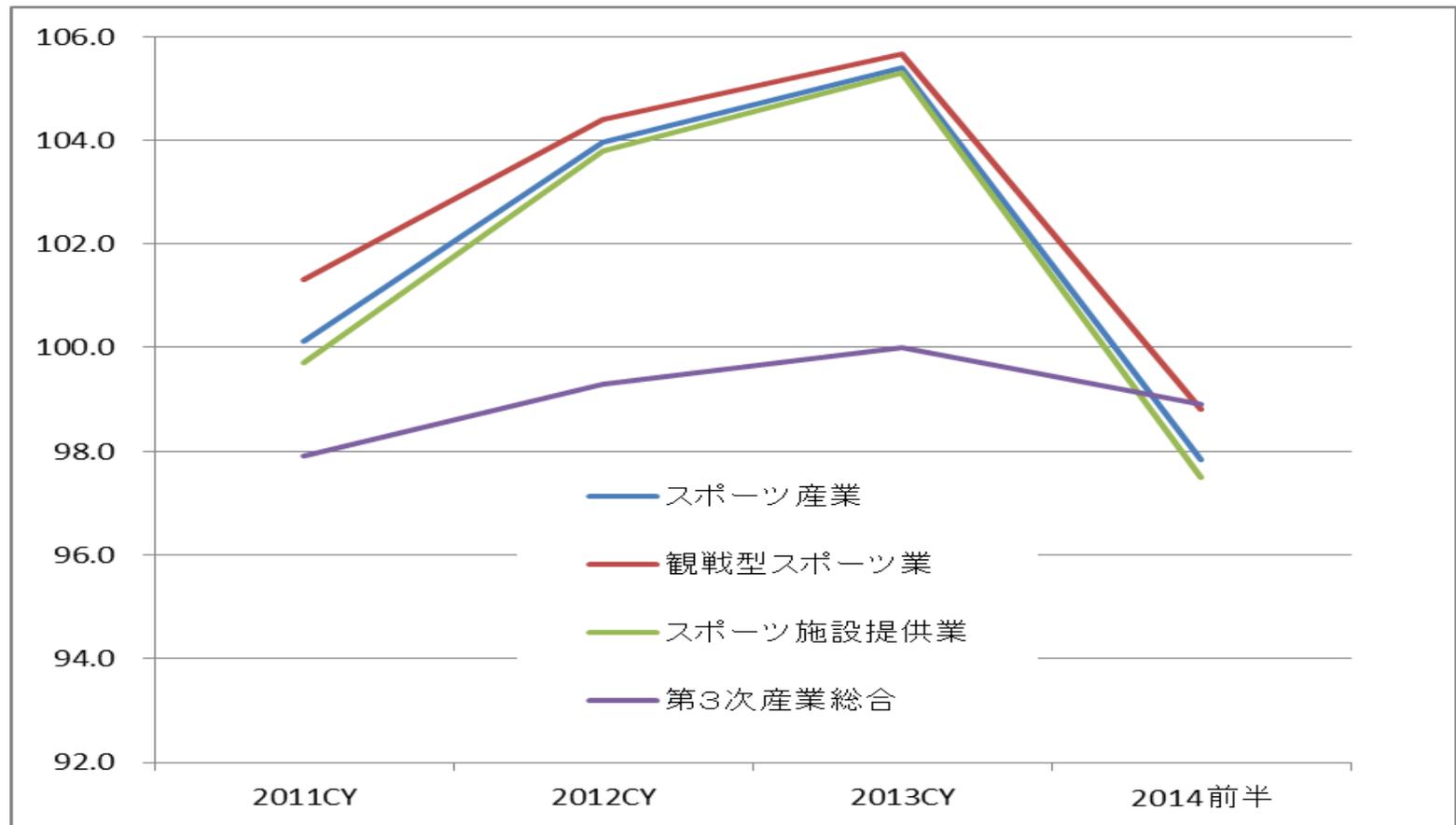
# スポーツ産業の動き

～スポーツ産業活動指数の推移から分かること～

- ✓ 非常に緩やかながら、第3次産業総合に比べると、拡大基調の産業。
- ✓ 外生的なイベントによる影響が強くなる産業であり、災害(天候不順)やそのスポーツの人気度に影響を与える事件、あるいは開催時期のズレなどの影響が強くなる。
- ✓ 他方で、鉱工業のみならず、上方トレンドのある第3次産業ですら大きく低下した08年の金融危機に起因する世界的な景気後退の時期にも、スポーツ産業は堅調に推移。
- ✓ 05年と10年で比較すると、第3次総合は▲2.2%低下であるが、スポーツ産業活動指数は3.9%上昇となっているので、基準改定を行うと、スポーツ産業のウェイトは増加するものと思われる。

# 26年前半のスポーツ産業活動指数

26年前半の原指数を第3次産業総合と比較すると、第3次産業総合の98.9、スポーツ産業活動指数は97.8



## 26年前半のスポーツ産業活動指数の内訳

- 25年暦年と比較すると、第3次産業総合の低下幅に比べて大きく低下している。
- 観戦型スポーツ業は、年後半に指数値が高くなるため、年前半が低めになるが、26年前半のスポーツ産業活動指数が低いことには、2月の大雪のために第1四半期に低下したゴルフ場、ゴルフ練習場の影響が大。
- 第1四半期の観戦型スポーツ業の前年同期比は4.5%上昇で、スポーツ施設提供業は▲5.3%低下となっている。

# 26年第2四半期のスポーツ産業活動指数

	4-6月期 原指数	前年同期比
第3次産業総合	96.8	-2.2%
スポーツ産業	131.1	0.4%
観戦型スポーツ業	175.4	5.0%
相撲	96.5	16.1%
ボクシング	90.1	-2.5%
プロ野球	199.7	4.8%
プロサッカー	107.8	9.6%
プロゴルフ	139.6	-4.8%
スポーツ施設提供業	115.3	-1.9%
ゴルフ場	123.2	0.7%
ゴルフ練習場	103.9	-2.3%
ボウリング場	58.9	-12.5%
フィットネスクラブ	129.4	-4.7%

26年第2四半期のスポーツ産業活動指数を見ると、スポーツ施設提供業は前年同期比低下となったが、観戦型スポーツ業が上昇したことにより、スポーツ産業活動指数としては、前年同期比上昇となった。

シーズン後、昨年と比べて好調に推移している。

第3次産業総合が前年同期比で低下しており、大分類13業種の内、10業種が前年同期比で低下しているのとは対照的な動きとなっている。

内訳としては、プロ野球、プロサッカーが好調のようであり、ウェイトは小さいが、相撲も好調となっている。他方で、ボウリング場の前年同期比が悪くなっている。